

# ウルフ『灯台へ』の視覚とその社会的な意味について

中土井 智

## 1. はじめに

本発表はヴァージニア・ウルフの『灯台へ』(1927)における視覚表現の社会的な意味を考察した。発表前半ではアンバー・ジェンキンスによる最新の先行研究を基に、ウルフの美学の「実際の生活 (real life)」を反映した側面を、1980年代以降のフェミニズム批評の概観や、『灯台へ』の構成と、画家でウルフの姉ヴァネッサ・ベルの美学ならびに彼女の作品との比較により確認した。発表後半では、ジェンキンスの議論を補足する形で『灯台へ』第三部の「海」の形式と意味の変遷と、画家リリー・ブリスコウの視覚との関連を読み解き、本小説の第三部が女性の身体経験を言語化する過程の寓意になっていることを論じた。

## 2. アンバー・ジェンキンスによるウルフの美学の再検討

ウルフの作品の形式には、ブルームズベリー・グループのメンバーであったロジャー・フライやクライヴ・ベルらにより提唱された美学との関連が長らく指摘されてきた。彼らの理論が想定する芸術の審美的な形式とは「純粹な形式 (pure form)」であり、日常生活や社会経験とは相容れない形而上の概念である。しかし1980年代以降のフェミニズム批評が、現実から切り離す美学理論を批判した。それ以来、ウルフの作品の登場人物達の現実世界への視覚的な反応や、視覚描写に関する技巧等、ウルフの作品の美学の社会的な側面、つまりウルフの作品の美学のフェミニズム的な側面の議論が続いている。本発表が主な先行研究としたアンバー・ジェンキンスは、*Virginia Woolf, Literary Materiality, and Feminist Aesthetics—from Pen to Print* (Palgrave Macmillan, 2023)にて、ウルフの作品の美学を、1920年代のモダニズム文化の視覚的・物質的側面との関わりから論じた。具体的には、メモを含めた草稿の推敲過程、本の装丁を含むホガース・プレスでの出版事業、ブルームズベリー・グループでの議論、主にヴァネッサ・ベルの絵画作品とウルフの作品との影響関係を調査した。ジェンキンスは、ウルフの美学に読み取られる現実の反映としての「表象的側面 (the representative nature of art)」(Jenkins, *Virginia* 9)を、1917年から1931年にかけての彼女の創作物を中心に明らかにした。

ジェンキンスの『灯台へ』に関する議論の要点は次の3点である。第一にウルフは、芸術において経験に基づく感情が重要であり芸術作品を他者と感情を共有する空間と捉えたヴァネッサ・ベルの考えを共有し、象徴表現における記号と意味の固定された関係を批判した。第二に『灯台へ』の三部構成が、ベルによる絵画 *Studland Beach* (1912)の画面構成と相似している点である。この作品は、ベルがドーセット州の *Studland Bay* へ旅した経験を基に制作された作品群の1つである。ジェンキンスによると、*Studland Beach* の画面構成一すなわち左手前に位置する母子、人が不在の中央の空間、手前の母の視線の延長線上に位置する右前方で女性が海を見やる一という構図が、『灯台へ』の三部構成に対応するという。そして第三として『灯台へ』の草稿内の表現が推敲の過程で写実から抽象へと変化しており、この変化はベルの *Studland Bay* をテーマにした一連の絵画作品の画風が具象から抽象へと変遷する過程に一致するという点である。『灯台へ』の草稿の初期段階では、作中の画家は Miss Sophie Briscoe という名で登場し、伝統的な写実手法を採用していた。しかし完成稿に近づくにつれて、画家は Lily Briscoe という名で登場し、その画風はより実験的なものへと変化するという (Jenkins, *Virginia* 129-41)。特筆すべきは、リリーの視覚表現には新たな形式の探求にとどまらず、視界に対する「主観的な身体経験 (subjective and embodied experience)」の表出が認められるという。ジェンキンスは、草稿後半の湾の描写を例に挙げ、リリーの視覚表現は、眼差ざす者自身と視覚対象とが連動するような身体経験を示すものに変化すると論じる (Jenkins, *Virginia* 141-48)。

## 3. 『灯台へ』第三部の身体をめぐる比喩の変遷について

本発表はジェンキンスの議論を発展させ、第三部における海の形式と意味の変容に着目した。ラムジー夫人の死後、灯台へ向かう船上で娘のキャムが海水に手を浸す場面では、水面が“green cloak”という表現で描写される。羽織に比喩されたこの表現は、第一部で夫人が着ていた“green shawl”や、第二部で夫人が思い出される際の“grey cloak”を想起させる。つまり第三部においてキャムが水面に触れる時の海は、ラムジー夫人の身体の換喩として機能しており、彼女が水に手を浸す行為は、修辞上、娘による亡き母との非言語的な接触を意味し得る。海に触れる時、キャムの主観が“her mind”から“one’s entire mind”へとその代名詞が変化するのは、個としての彼女の自己意識が曖昧になり、対象へと延長してゆく感覚を可視化していると解釈した。

## 4. 魚を釣る画と身体の言語化

この「身体としての海」から漁師のマカリストー青年が魚を釣り上げる行為は、ウルフによるエッセイ “Professions for Women”における比喩と照らし合わせることで、その象徴的意味が鮮明になる。ウルフはこの

エッセイで、女性が身体や情熱について想像する過程を、漁師が深い湖の畔で魚釣りをしている様子に喩えた。つまり第三部の船上でのキャムによる海との接触、ならびにマカリスト青年がその海から魚を捕獲する一連の協働作業は、女性の主体が身体について想像することの寓意となっていることが分かる。

さらに第三部でマカリスト青年により釣り上げられる魚の描写が、“a mackerel”、“the fish”、“a square”と具象から抽象へと変化する。この変化は芝地でラムジー氏親子達が乗った船を眺めるリリーの認識と連関する。ジェンキンスが本小説の草稿の分析により指摘したように、リリーの視覚には眼差ざす者自身と視覚対象との呼応を促すような性質が認められた。本発表では完成稿のリリーの視覚をあらためて確認することで、彼女の視界に対する身体的な反応を再確認した。次の引用は、第一部で、リリーが植物学者のウィリアム・バンクス氏と湾を眺めるときの景色である。ジェンキンスがこの場面の草稿に関して指摘するとおり、景色を見る者の身体と視界とが繋がっているかのように描かれる。

They came there regularly every evening drawn by some need. It was as if the water floated off and set sailing thoughts which had grown stagnant on dry land, and gave to their bodies even some sort of physical relief. First, the pulse of colour flooded the bay with blue, and the heart expanded with it and the body swam, only the next instant to be checked and chilled by the prickly blackness on the ruffled waves. (24-25 underline added)

下線部にあるように、波の動きに思考のみならず身体までもが反応してほぐれてゆくかのようなのである。波の色を表す“the pulse of colour flooded the bay with blue”、それに伴う“and the heart expanded with it and the body swam”といった表現は、波の色の動きに合わせてそれを見る者の拍動が連動するかのようである。

視界を身体化するリリーの眼差しは、第三部で船が前進するのに伴い、リリーが身体感覚をおぼえてゆくという本小説の2つのプロットの連関を根拠づけるものである。実際第三部にてリリーが芝地からラムジー氏達の船を眺めるとき、彼女は船をその帆の色を目印に“greyish-brown” (185)、そしてそれがだんだんと遠ざかると“blue” (207)と、色のまとまりとして認識する。そして船旅が進むにつれてリリーは、“how could one express in words these emotions of the body?”、“It was one’s body feeling, not one’s mind.” (194)と、自分の身体感覚を意識してゆく。つまりラムジー氏親子一行の船旅とそれをリリーが眺める構図は、船上でのキャム達の経験の次元とリリーの認識の次元に対応し、両者の連携は全体として海に比喻された身体を分節し、象徴する様相を表すと解釈できる。

## 5. 結論

本小説は、夫人（の像）をめぐる海の表現を、夫人の羽織・サバ・魚・四角へと、その形式と意味の対応関係を転換させる。この意味の変遷をリリー・ブリスコウが認識する本小説の構成は、リリーの主観において身体について想像する過程として読む事ができる。『灯台へ』における視覚は、身体としての人間の生(life)を言語化する過程の寓意である。彼女の創作の理念“Beautiful and bright it should be on the surface, . . . but beneath the fabric must be clamped together with bolts of iron.” (186)のとおり、表面の美しい言葉たちの下鉄のボルトの厳密さで組み合わせられる作品の構成自体が、本作品のフェミニズム思想の体現であるとまとめた。

## 引用文献

Abel, Elizabeth. *Virginia Woolf and the Fictions of Psychoanalysis*. U of Chicago P, 1989.

Goldman, Jane. *The Feminist Aesthetics of Virginia Woolf: Modernism, Post-Impressionism, and the Politics of the Visual*. Cambridge UP, 1998.

Jenkins, Amber. “Drafting Mrs. Ramsay and Lily Briscoe: Visual Aesthetics and the Manuscript of Virginia Woolf’s *To the Lighthouse*.” *Woolf Studies Annual*, vol.27, 2021, pp. 5-22.

---. *Virginia Woolf, Literary Materiality, and Feminist Aesthetics—from Pen to Print*. Palgrave Macmillan, 2023.

Woolf, Virginia. “Pictures.” *The Essays of Virginia Woolf*, edited by Andrew McNeillie, vol. IV, Hogarth P, 1994, pp. 243-46.

---. “Professions for Women.” *The Essays of Virginia Woolf*, edited by Stuart N, Clarke, vol. VI, Hogarth P, 2011, pp. 479-84.

---. *To the Lighthouse*. Edited by Stella McNichol, Penguin, 1992.

中土井智「Enfolding Feminismを再考する」『ヴァージニア・ウルフ研究』第39号、日本ヴァージニア・ウルフ協会、2022年、72-85頁。